平成30年度　第68回高知県芸術祭

第47回高知県芸術祭文芸賞
入選作品集

第68回高知県芸術祭助成事業「KOCHI ART PROJECTS2018」
インスタント“KANTA”ポートレート展

高知県芸術祭執行委員会

平成30年度　第68回高知県芸術祭

第47回高知県芸術祭文芸賞
入選作品集

文芸賞・文芸奨励賞・佳作

インスタント“KANTA”ポートレート展で使用した箱カメラ

手作りのアナログインスタントカメラのこと。

レンズを通過した光に、木箱内部で印画紙を露光。箱カメラの内部にはあらかじめ現像液、定着液がセットされており、撮影後そのままカメラ内部で現像作業を行います。

Jeffrey Lim（ジェフリー・リム）

1978年、マレーシア、クアラルンプール生まれ。写真家・アーティスト。アイデンティティと文化的背景を、写真（イメージ）やファウンドオブジェクト、空間、そして人との交流を抽象的に落とし込んだ作品多数。

前田実津（マエダミツ）

1984年、高知市生まれ。写真家。
日々の生活のなかで起こる小さなストーリーを注視するようなドキュメンタリー作品多数。人と土地との関係性や、営みの有機性などを強く意識している。

もくじ

〈短編小説〉

芸術祭文芸賞
時が消えた森……安藝友知史……1
芸術祭文芸奨励賞
間(あわ)いの豊饒……柴田由……6
泣きたくなったら、ここにおいで。……野村生一……11

〈詩〉

芸術祭文芸賞
おれおれ……下元真人……17
芸術祭文芸奨励賞
一日の終わり……甫木恵美……20
あなたは柳……和田由香……23
やったね末ちゃん……岡本敏之……26
真昼の怪談……田中福三……29
監獄惑星……倉橋孝彰……31
佳作
とめどなく……吉門あや子……33
詩人「尹東柱(ユンドンジュ)」……いずみしづ……36
そんざい……恩田凍羽……38
水と共に……片岡和子……41
亡(は)母……國友積……44

〈短　歌〉
芸術祭文芸賞……蛭子泰明……47
芸術祭文芸奨励賞……尾崎淳・左山遼・井上志津
竹村有未・松田悠大……47
佳　作……中島涼・沢村洋子・矢野重雄
山崎光子・谷柚帆……49
〈俳　句〉
芸術祭文芸賞……筒井南実……51
芸術祭文芸奨励賞……足立秋子・中村梅子・山崎紀美子
和田和子・乾真紀子……51
佳　作……矢野重雄・岡林知世子・明石韮生
竹中良子・島崎有造・田村乙女
村岡希音・熊谷敏郎・大窪雅子・山下正雄……53
〈川　柳〉
芸術祭文芸賞……山本由美……57
芸術祭文芸奨励賞……近藤糾・足立秋子・瀧本あおい
藤田歩・徳永逸夫……57
佳　作……沢村洋子・大野美智子・笹岡日向
山本世志恵・藤田ゆずあ・山下正雄
熊谷敏郎・岡林裕子・長瀧叶太……59
〈審　査　評〉……63
〈作品募集要項〉……68

短編小説

時が消えた森

安芸郡芸西村　安藝友　知　史

月の見えない夜、初老の男がひとり、細い路地に立っている。色褪せたステンカラーのコートを着て、うっすらと無精髭の生えた顔を空に向けている。男の光のない目は、道端に佇む古ぼけた街灯の明かりに向けられている。蛍光灯が、まるで何かの暗号を送っているかのように、不規則な点滅を繰り返している。その明かりに群がる二匹の蛾を、男の瞳が捉えている。体が触れては離れ、また触れては離れ、点滅する光の下で奇妙なダンスを繰り返す蛾たちを眺めながら、男がぽつりと呟く。

「あれは、夫婦なのかなあ」

アパートに帰ると、男はコートを脱いで丁寧に皺を伸ばしてからハンガーにかけた。袖口がほつれ、襟元も擦れて穴が開いている。それでも男はもうずいぶんと長い間、そのコートを着続けている。汗が浮く暑い夏の日も、雪が舞う寒い冬の日も、男は一日も欠かさず同じコートを着ている。

それから男は、窓際に置かれたキャビネットに向かう。キャビネットの上に並べられたいくつもの小さなガラス容器、男は身をかがめてその中を覗き込む。ガラスの向こうには、小さな緑が広がっている。

苔だ。

丸い形のガラス容器にはボール状の姿をしたホソウリゴケ、薬瓶のような形の容器には背の高いスギゴケとハリガネゴケ、様々な形の容器の中で静かに息づく苔たちを、男はじっと眺めている。目を細めて、まるで生まれたての我が子を眺める父親のような優しい顔をして。

そうしてしばらく苔を眺めたあと、男は電話機を手に取ってダイヤルボタンを押す。かけ慣れた番号……、指が覚えている。男は受話器を耳に押

しあてる。少しの間があってから、聞き慣れた声が男の耳に届く。
「もしもし」
女の声。
「やあ、今帰ったよ」
「おかえりなさい」
女はどこか遠くのしん、とした場所にいる。
「明日、僕は森に行こうと思ってる」
「そう……」
「また、きみに会えるかな」
女は、すぐに答えない。
「そうね、会えるといいわね」少ししてから、小さな声が男の耳に届く。

翌朝、男は近くの田舎駅から単行列車に乗る。線路は小さな町から田園を抜け、そして海へと延びている。走る列車の窓から、男は目の前に広がる太平洋を眺めている。海は凪いで、午前の太陽の光を鏡のように映している。海岸線の道路を、鮮やかな色のスポーツカーが走っている。男は昔のことを思い返す。窓を全開にして、気持ちのいい海風を受けながらハンドルを握り、あの道を走っていた頃のことを。

やがて列車は海沿いの小さな無人駅に着く。駅前のバス乗り場で時刻表を見た男は、小さく頭を振ってから諦めたように歩き始める。

集落を抜け、川に沿った道を上流に向けて一時間ほど歩く。男が着ているステンカラーコートの首や脇の部分が、汗でじっとりと湿りはじめる。目的地に着いた頃には、太陽はもう真上まで昇っている。

草が生い茂った水路の先に、小さな洞窟が見える。男は水路に下りると、靴が濡れるのも気にせず洞窟の中へと歩を進める。岩でできた自然のトンネルを抜けると、切り立った両壁をシダの群生が覆いつくしている。足元は沢になって、その中を男は水を吸ったスニーカーで音を立てながら歩いていく。シダの壁の先に、一面緑の世界が広がっている。背の高い木々が空を遮って、枝が風に揺れるたびに木漏れ日が地面に落ちる。

そこは、森の中。
木々の根元には、苔むしたいくつもの大きな岩が転がっている。男は身をかがめて、ひとつひとつの岩を注意深く眺める。そしてその格好のまま、森の奥へと足を進める。晴れているのに、森の空気は湿っている。しばらく歩いて、男は一本の大きな木の根元で立ち止まる。まるで木が靴下を履いているみたいに、苔が根元に半球状の群落を作っている。男はしゃがみ込んで、肩にかけているショルダーバッグの中から小さなガラス瓶を取り出す。ピンセットを使って群落から一部を取り、慎重にガラス瓶の中に入れる。それから男は立ち上がって、木漏れ日に向かい瓶を高く掲げる。瑞々しい緑が、ガラスの中で光っている。
「ホソバオキナゴケね」
急に声がして、男が振り返る。
そこには、女が立っている。男よりもずっと若い女が、目を細めて大きな木の横に立っている。
やあ、と言いながら男が微笑む。風が木々の葉を鳴らす。姿の見えない鳥たちが、鳴き声だけを落としていく。
二人は、大きな岩に並んで座る。男が瓶の中の苔を眺めながら言う。
「テラリウムは、きみが教えてくれたんだ」
女が、その横顔に尋ねる。
「その子たちは、ずいぶん増えたでしょうね」
「そうだね。たくさん、増えたよ」
男が、満足そうに笑う。
「今日も、そのコートを着ているのね」
「これは、きみが選んでくれたコートだから」
色褪せた袖口をじっと見つめながら、男は小さなため息をつく。
二人の間に、沈黙が降りる。深い、長い沈黙だ。森の息遣いだけが、あたりを包んでいる。
女はじっと、男を見つめている。その視線に気づいて、男も女のほうを見る。女は、悲しげな眼をしている。そして、悲しげな声で言う。
「そろそろ、あなたの時間を動かして」
「時間？」

女は、大きな木を見あげる。
「この立派な木も、いつかは朽ち果ててしまう。地面を覆っている苔たちだって、それが分かっているから、胞子を飛ばして新しい命を作る。森も、時間を刻んでいるのよ」
「時間……」
男が手の中のガラス瓶を見つめながら、もういちど呟く。

帰りの列車の窓からは、夕陽に赤く染まる海が見える。朝の穏やかさが嘘のように、海は大きな波を幾重にも連ねている。列車がカーブに差しかかったとき、眩しい太陽の光が窓から差し込んで、男は目を閉じる。その瞬間、あの日の記憶が瞼の裏に蘇る。

最初に苔のテラリウムに夢中になったのは、妻の江梨子のほうだった。長い不妊治療の末、やっと授かった我が子を死産してしまってから、江梨子は狂ったようにテラリウム作りに没頭した。窓際に並べた苔の入ったガラス瓶を何時間も眺めたり、話しかけたりもした。男はそんな妻に何も言わなかったし、休日には妻を連れて車で森に向かった。海沿いの道をドライブするだけでも、江梨子の気分転換になるんじゃないかと考えたからだった。

あの日も苔の入ったガラス瓶を後部座席に乗せて、二人は森から帰る途中だった。今日と同じように、真っ赤な夕陽が海を照らしていた。車がカーブを曲がる時、夕陽の眩しさに男は目を細めた。一瞬、光で視界が奪われた。そして視界が戻った時に男が見たものは、反対車線からまっすぐこちらに突っ込んでくるトラックの姿だった。衝突を避けようと、男は反射的にハンドルを右に切った。

反射的だった。妻が助手席に乗っていることなど、その時には考える余裕さえなかった。

トラックは車の左前をかすめ、そのまま助手席のドアに突っ込んだ。ひどい衝撃があって、車は何度か横転した。その途中で、男の意識はなく

なった。
目を覚ました時、男は病院のベッドにいた。朦朧とした意識のまま、白い天井を見あげていた。医師が近寄ってきて、男の耳元でこう告げた。
「お気の毒ですが、奥様はお亡くなりになりました」
その言葉が男の耳に届いたのかどうかは分からない。男は無表情のまま、ただじっと青白く光る蛍光灯を眺めていた。その光に群がる二匹の蛾を、ただぼんやりと見つめていた。果たして、その蛾たちが本当にそこに存在していたのかどうかさえ、今ではもう分からない。

森から帰った男は、ホソバオキナゴケが入ったガラス瓶をキャビネットの上に置く。それから電話機を取って、ダイヤルボタンを押す。受話器を耳に押しあてて、彼女の声が聞こえるのを待つ。
いつものように……、江梨子の声を……。
けれど、いつまで待っても彼女の声は聞こえない。壁の掛け時計が、カチカチと時を刻んでいる。
その時、男の目から涙が零れ落ちる。もう何年も流したことのなかった涙が、堰を切ったように溢れ出る。そしてそのうち、男は肩を震わせてしゃくりあげる。
電話機の向こうでは、いつもと同じ機械じみた声が、その電話番号は使われていないと繰り返し告げている。

間(あわ)いの豊饒

高知市　柴田　由

清らかな墨の香(か)に部屋中満たされている。

二十五年前に奈良の製造元にまで足を運んで求めた品だ。硯は主宰する書道会の会員たちと一緒に十五年前に石碑見学旅行で訪れた中国で購入したものだ。四半世紀寝かした墨はいい具合に余分な油分がとんでいて、摩ると硯の上でしゃりしゃりと音を鳴らしながら、滑らかにその身を少しずつ減らして、鮮やかな黒色の液体に変わっていった。

毛氈に半切を広げる。この紙も十年ほど前に千枚単位で買い求めた美濃紙だ。手にする筆はここ数年愛用している羊毛筆。

そっと置くように筆先を紙につける。流れるような草書で二行、文字を認め筆を離す。長年寝かした墨に対して、紙の状態は期待したほどには良くなってはいなかった。

長女が訪ねてきている。

階下のダイニングから、妻と長女の話す声が二階の書斎にまで聞こえる。

長女は子どもの頃から聞き分け良く、思いやりがあった。今まで二人ほど結婚を考えた相手がいたようだが、どちらとも結ばれなかった。実家近くでまだ一人暮らしをしている。

次女は地元の専門学校を卒業するとすぐ結婚し、県外で暮らしている。今では二児の母だ。正月に孫と帰省した折りなど、孫にお年玉をやろうとすると、「私にはないの？」とちゃっかりとせがむ。長女に比べると我が儘で甘えっ子だった子どもの頃のままだ。そういえば年齢的にそろそろ、孫たちに上げるお年玉の金額も増やさないといけないだろうか。

毛氈に半切をもう一枚広げてさらに文字を書こうとしていると、膝に擦り寄ってきたものがいる。

黒猫のミーだ。頭を膝にすり寄せて小さく鳴い

ている。かまってほしい時の仕草だ。
ミーは長女が大学三年の時に拾ってきた。
ある日の帰宅時、大学の駐輪場に置いていた長女の自転車の前カゴに子猫がいた。
数週間前から同じように真っ黒な母猫と二匹で近辺をうろついていたが、前日に母猫は駐輪場から出てすぐの国道で、車に跳ねられて死んでいた。自転車整理をやっている初老の男性によると、子猫は昨夜から一晩中母を求めて泣き続けていたらしい。泣き疲れたのか、カゴの中で小さくお腹を上下させながら泥のように眠っている。なにも口にできなくて衰弱しているのかもしれない。たまらず長女は連れ帰ってきた。一度獣医に診てもらい、そのまま家で飼うことになった。
「真夜中(minuit)みたいに黒い」毛色だったのと、子猫を意味するフランス語から「ミヌー」と長女は名付けたらしいが、子猫だった時期は一瞬で、あっという間に成猫になった。呼び名も結局、ミーという代わり映えしないのになった。若く毛並みがつやつやだった頃は毛氈の上で目を閉じて香箱座りしていると危うく踏んづけそうなくらい真っ黒だったが、このところは年のせいか、毛氈の上にいても一目で区別が付くほどに毛艶が褪せてきていた。長女が家を出てからは、ミーの世話はもっぱら自分の役割になった。
夢を見ていたようだ。
夢の中で夢から覚めるような感覚のまま、自分が半覚醒なのが分かる。
階下のダイニングで喋っていると思った妻と長女は、病室のベッドの側に置かれた椅子に腰掛けて話しているようだ。ベッドは厚いカーテンに囲まれているので、二人の会話はくぐもって聞こえる。地元の病院で検査を受けたら急遽岡山のこの病院を紹介され、緊急手術となったのだった。
目を開(あ)けようとするが開(ひら)かない。麻酔がまだ残っているのか左腕につながった点滴の薬剤なのか、起きようとしているのにどうしても起きられないまま、聴覚だけは機能を取り戻し始めている。まだ夢うつつながら、妻と長女の会話ははっきりと聞き取れた。

「麻香はまだ顔を見せないの？」
次女の名だ。
「しょうがないじゃない。琉紀と華の学校もあるんだから」
「でも、手術にも立ち会わないなんて」
「来なくていいってわたしが言ったからよ。遠いし、まず大丈夫だからって」
「でも…」
自分は二日間の有給をとってまで手術に立ち会ったのに、妹は立ち会うどころか、見舞いにさえ来ないかもしれないことが長女は不満らしい。それを妻がなだめているようだ。目は開かないが、耳は確実に機能しはじめた。ヒトの五感で最後まで機能するのは聴覚というから、ひょっとしてこの世を去る時も、妻や娘、孫の姿は先に見えなくなって、声だけが最後まで聞こえるのだろうか。
「会員さんたちはお父さんの手術のこと知ってるの？」
「一部の人には知らせてたみたい。ちょっとした手術だって伝えてたし、県外の病院だから、そんなにお見舞いに来る会員さんはいないんじゃないかしら。別府さんと那須さんが代表で来るくらいじゃないかな」
妻は会員のまとめ役の二人の名を上げた。
「あの人、来ないかな？」
「さすがに来ないでしょ。何年も前の話だし」
二人はまだ自分が眠っていると思っているのだろう。いや、ひょっとしたら自分自身、起きている夢を見ているだけかもしれない。
十年以上前になるだろうか、会員でとても自分を慕ってくれる女性がいた。おそらく、書道の先生以上の慕い方をしてくれていたと思う。
当時、自分は五十代にさしかかったところ、彼女は三十代の後半だった。大人の美しさを持つ女性だった。早くに結婚して子育ても一段落したので、なにか新しいことに挑戦したいと入会してきた。
向いていたのだろう、それまで筆を持ったことはほとんどなかったらしいが、瞬く間に上達し

た。特に和様漢字はすぐに自分をしのぐのではないかという腕前になった。流麗で華やかな文字運びが、彼女の容貌とよく似合っていた。

「あの人、絶対にお父さんを男性として意識してたよ。あたしもあの頃のあの人に年が近づいてきたから分かるけど、お父さんみたいな感じのおじさんって、割とストライクゾーンに入ってくるのよね。特にお父さん、髪型とか服とか結構小綺麗にしてたし」

確かに自分のみてくれにはそれなりに気をつかってきた。「書」という美に関わる者としての責任だ。書や絵、写真をやる人間で身に付けるものにまるで無頓着なくせに美とはなんぞやを語る者が時々いる。服や靴など身に付ける物に無頓着、ひどいのになるとフケが肩についていたり鼻毛が出ている顔で芸術を語る奴がいるが、言行不一致にもほどがあろう。

事実、彼女からアプローチはあった。一緒に二人で食事でも、といった思わせぶりなメールも届いた。短大を出てすぐ建設会社の息子と結婚した。会社を引き継いだ夫は忙しく日々を過ごしていた。若く出産したので、子どもに手がかからなくなるのも早かったが、母親を邪魔者扱いする年頃になるのも早かった。学生の頃の友人とも疎遠になっていて、誰もかまってくれない。会えば、そういったちょっとした身の上相談や愚痴の聞き役にされることも多かった。淋しかったのだろう。

彼女の顔を最後に見たのはいつだったか。淋しさを埋め合わせられるほかの何かを見つけたのか、いつのまにか彼女は姿を消した。

そういえば、スマートフォンもＳＮＳも一般的ではなかったあの当時は、もっぱらパソコンのメールで彼女とはやりとりしていた。書斎に置いてあるパソコンには、まだ彼女とのやりとりが残っているはずだ。

今回の入院と手術で万が一を考えなかったわけではない。所有している文房四宝で価値のあるものは託す相手を考えてきた。会員たちが開催してくれたかもしれない遺墨展にも、それなりに作品

候補を選んではいる。いずれにせよ万が一があった場合は、妻がすべて上手く取りはからってくれただろう。

しかし、パソコンのデータまでは考えが及ばなかった。削除しておくべきだったかもしれない。だがパソコンの中にはだれかれ、他人には見せられないデータの一つや二つあるはずだ。自分がもしこのまま自宅に戻れなかったとしても、妻は特にパソコンの中を見たりもせずそのまま処分してくれるだろう。そんな女だ。

愛車のことも気にはなる。古いイタリア製マニュアル車で、一週間もエンジンに火を入れなければ調子を崩すような気難しい車だ。妻も長女もオートマチック車しか扱えない。帰っても、手放すことになるかもしれない。

「そろそろ帰るね。ミーの世話もあるし。明日は秋禎(あきさだ)が車に火を入れに来てくれるから」

長女が帰るようだ。見送ろうと思うが体が動かない。それに秋禎って誰だ。

「よろしく伝えてね。面倒なお願いで申し訳ないって。でもお父さんの大事な車だから」

「全然面倒じゃないみたい。『こんな車のハンドル握れるなんて』って喜んでた。お父さんが帰ってきたら、ちゃんと紹介しなきゃね」

どうやらとても良い話が待っているようだ。顔に光が差した。ベッドを囲むカーテンの隙間から、長女が覗き込む気配がする。

「あら、お父さんなんか寝顔がうっすら笑ってるんだけど」

「もうすぐ醒めるのかしら。顔見せてく?」

「ううん、起きたらよろしく言っておいて」

それじゃね、お父さん。そう囁いて、長女が病室から出ていく気配がした。

なああーん。

猫の鳴き声が聞こえた。毛氈の上から黄色い瞳で見上げてくる黒猫の見慣れた顔が瞼に浮かんだ。

泣きたくなったら、ここにおいで。

須崎市　野村生一

旅先の小さなホテルの部屋で目が覚めると、わたしは泣いていた。

眠りにつく時に泣き、夢の中で泣き、目覚めた時にも頬を涙が伝っていた。

家にいても、こうやって一人で旅先のホテルにいても、涙は時々止め処もなく溢れ頬を流れ落ちる。もうどれくらい涙を流したことだろう。もうどれくらい同じ夢を見たことだろう。夢の中のあなたは、いつもわたしの側にいた。緩やかな曲線を描く風のように、あなたの指がわたしの髪を撫でてくれる。でも今は、わたしの横にあなたはいない。たとえ緩やかな曲線を描く風が吹いても、白いレースのカーテンが、わたしだけのベッドの上で静かに靡いている。まるで、この窓から、あなたが出て行ったかのように。

あなたを失って三ヶ月が過ぎた。突然、あなたを失った。それは、突然全ての光を失ったように、限りなく暗黒に近い暗闇にわたしは取り残された。

そして、二日前に仕事を辞めた。

今、わたしは高知県にいる。あなたが生まれた町に居る。あなたが子どもの頃に見た風景をわたしも見ている。一緒に見るはずだった風景を、ひとりで見ている。

ここは、須崎市。目の前に鼓動を響かせ横たわる生き物のような岬が、太平洋の水平線を掴もうとしている。振り返れば緑豊かな田園と、その向こうに穏やかな山並みが物静かに寝そべっている。その安穏とした山並みの麓に、内海が広がる。太平洋とは、まったく違う表情。波もなく鏡のように、安穏とした山並みと、気絶しそうな青空を映している。あの内海、浦ノ内湾が、わたしの旅の目的地。

「巡航船が、一日四便走ってて」

「走る、どこを？」
「だから、浦ノ内」
「どんな船なの、その巡航船」
「おんぼろだよ。でも可愛い。エンジン音がうるさいんだ。だけど乗ってるとだんだん気にならなくなる。なんか、笑ってるみたいに聞こえる。ガハハハハって」
あなたは、何度も笑ってくれた。変な声で。巡航船のエンジン音だと言う笑い声で。今も、その笑い声が聞こえる。わたしは、その声が聞きたくて、あなたの笑う声がもう一度聞きたくて、ここに来た。
会いたくて。あなたに会いたくて。
浦ノ内湾を地図で見ると、海と陸地が入り組んでいて、くねくねととても複雑な形をしている。まるで巨大な龍が踊っているような。楽しんでいるような。そのご陽気な龍の背中の真ん中辺りの「深浦」という巡航船の乗り場に来た。乗り場と言っても大きな看板もバス停のような時刻表もない。地元の人にしかわからない「市営巡航船のりば」の小さな看板が傾いて、そこにあった。観光協会のホームページで調べて来たからあと三分で巡航船が来る。ホームページを見て知ったんだけど、あなたが言っていた一日四便が、今は三便になっていた。便数が減るという事、それは何を意味しているか、わたしにも分かる。確かに、ここに来て誰も人に会っていない。だけど、寂しくないのは何故だろう。
「あっ」
聞こえる。
笑い声が、聞こえる。
突然、泣きそうになった。
笑っている。あなたが、笑っている。あなたが、近づいてくる。近くに、近くに、笑い声。
市営巡航船は、小さく、でも白い船体は内海では、何故か大きく見えた。海面を滑るように、船着場というより、堤防の一部のような乗り場に、笑いながら滑り込んできた。不思議な海の生き物のような巡航船には、左右に沢山の窓がある。それが陽気な海の生き物をイメージさせた。

船首の窓に人の姿が見えた。船を操縦、と言うか操舵する船長のようだ。船長は、堤防のような船着場に巡航船を近づけると、船室から出てきて、船着場と巡航船をロープでつないだ。

「はーい、お疲れさま」

と言うと、後ろからランドセルを背負った小学生の男の子が三人降りて来た。

「ありがとう神様」

口々にそう言うと、わたしの横を会釈しながら通り過ぎて行った。それより、気になったのは、「ありがとう神様」だった。

神様？

「乗船されますか？」

神様が、笑いながら言った。

「はい。なきなしまで」

「鳴無（おとなし）ね、鳴無神社の」

そうだ、鳴無（おとなし）って読むんだ。知っていた筈なのに。ちょっと恥ずかしかった。

「どうぞ。貸切です」

そう言うと、神様はまた笑った。この町で出会った地元の男性と比べ、色白に思えた。わりと背も高く、すらっとした感じが、年齢を不詳に見せていた。烏帽子と白装束の似合う神主さんのようにも見えたし、神様と言われれば、そんな気もした。

神様が操舵席に座ると巡航船は、なんの合図もなく出航した。

船内は、対面式のベンチシートが両方の窓に沿って並ぶ。わたしは、なんとなく神様の背中の見える側のベンチに座った。賑やかなエンジン音は、まだエンジン音のままだった。でも、出航して間もないのに窓から心地よい風が入って来る。沢山窓があって風が適度に分散するからなのだろうか。風は強くなく、髪を大きく乱すこともなく、エンジン音を運んできた。

あなたが言ったように、すぐにエンジン音は気にならなくなった。

風向きが少し変わった時、エンジン音が笑い声

に聞こえた。この巡航船が船着場に入って来た時に感じた笑い声。
　わたしの耳元で、あなたが笑っていた。
「笑ってるように聞こえませんか」
「えっ」
　突然神様は、わたしに背中を向けたままそう言った。驚いた。少し戸惑った。
「エンジン音、ガハハハハって笑ってるんだそうです。かなり以前の話ですけど、そんなこと言った中学生がいました」
「中学生・・・」
　そう応えるのが精一杯だった。
　白いワイシャツを着て、学生帽を被った中学生がわたしの前に座っていた。わたしを見つめていた。温かくて記憶にある微笑み。巡航船が大きく向きを変え、船内に夕日が広がったと同時に、中学生の姿は消えた。眩しいくらいの夕日は、船内を金色に輝かせた。操舵室の神様の背中も金色に染まっていた。不思議なことに、その背中全体の輪郭が光を放っていた。夕日の反射とは違う、もっと神々しい光を。
　また、涙が溢れた。拭うと、その手が金色に輝いていた。
「この浦ノ内の海には、昔から龍神小僧が棲んでいて、流した涙を呑んでくれる。だから、鳴無神社は、泣かない神社なんだそうです。鳴無神社の本当の由来とは違う地元に伝わる御伽噺ですけどね」
　窓の外に鳥居が見えた。巡航船は、その鳥居に向かって真直ぐ静かな海を滑って行く。
「鳴無神社です」
　海に突き出た鳥居の奥に美しい本殿があった。
「鳴無神社の神様は、一言主大神（ひとことぬしのおおみかみ）で、一言だけ想いを聞いてくれるそうです。社務所で紙を貰って、想いを書いて、この海に流して下さい」
　巡航船は、鳥居の側の桟橋にとまり、わたしは船を降りた。目の前に真っ赤な大きな鳥居があった。わたしは振り返った。そこに神様がいた。また笑っている。船長さんの本当の名前を知らな

い。でも神様でいい。また、この巡航船で会った時、神様と呼ぼう。
風が吹いた。緩やかな曲線を描きわたしの髪を撫でるような風。
「また、泣きたくなったら、ここにおいで」
その言葉を残して神様の巡航船は、金色の海を滑って行った。
鳴無神社の鳥居を潜ると、空を見上げた。凛とした空気の柱が空高く伸びているようだ。わたしはその空気の柱を通り抜け静かに参拝した。
社務所で貰った紙に、一言だけ想いを書き、鳥居の側の海に流した。暫くすると紙は溶けてしまい海になった。きっと、あの龍神小僧が呑みこんでくれたんだ。
一歩前にでると、玉砂利をしっかりと足で感じることができた。
次の日、巡航船の乗り場に行った。思ったとおり、神様に会うことはなかった。でもあの時、神様の横にあなたも居たよね。そして神様と同じように笑いながらわたしに言ってくれた。
「泣きたくなったら、ここにおいで」
来るよ。また。
そんな時があったら。

詩

おれおれ

高知市　下元真人

おれおれ　おれ
だれだれ　だれ
おれだよ　おれ
だれだよ　だれ
おれ
だれ
おれ
だれ
むすこだ
こえちがう
ごほごほ　かぜひいた
びょういん　すぐいけ

かあちゃん　たすけて
おやを　たすけろ
かね　おくれ
そっちこそ

かいしゃのかばんおとした
　かねたてかえて
ねんきんおとした
　せいかつひかせ

ほんとはかいしゃのかねつかいこんだ
じょうしにあやまれけいさつゆけ
かいしゃくびになる
かえってこいまっている

ひゃくまんえんぶかがとりにいく
じぶんでちゃんととりにこい
たっきゅうびんでおくれ
やさいとこめならおくってやる

おれだよかあちゃん　むすこをしんじろ
じぶんの　ははにいえ
がちゃっ　つーっ　つーっ　つーっ

一日の終わり

高知市　甫木恵美

風呂上がり
痺れる足の指をさすってやる
よおく見てみると
五本の指がお互いを庇うように寄り添っている
とりわけ、小指は薬指にぴたっとくっついて離れないのが何ともいじらしい

十本の足の指は慎ましく生きる
十本の足の指は逞しく生きる

今日できることをやるだけ

今日できることはこれだけ
十本の指は人が見ていない場所でも
手を抜いたり、さぼったりしない

時には汗を掻きながら涙を滲ませる
時には歯を食いしばって踏んばる

十本の指が
それぞれ、主張することもあるだろう
十本の指が
それぞれ、夢をみることもあるだろう

それでも
根元は一緒

自分の足の指を眺めていると
父の足の指のかたちを思い出した

何があったかは問わず

今迄のことはさておき
優しく労るように揉んであげよう

一日の終わり
安息の眠りにつくために

あなたは柳

高岡郡佐川町
和田由香

長姉は桜
次姉は橘
三姉は紅葉
四姉はニセアカシア

私は「柳」

しなやかで強く
さらさらと優しい
柳のようだと
言ってほしい

未来は
こんな私を待ってくれていますか
いつかさっちゃんと行った
足利学校の庭に
凛々しく風に吹かれていた　柳
動じない
そんな人間に私はなれますか

そうだ
柳を植えよう
今度の日曜日
園芸店へ買いに行こう
それともネットで取り寄せようか
庭に植えるのだ
毎日水をやり
眺め
話しかけ
泣いて笑って
そして時々　そっと触れさせてもらおう

そしたらいつの日か
「あなたは柳のようだ」と
言ってもらえるかもしれない
言ってもらいたい
言ってもらうために

やったね　末ちゃん

高知市
岡本敏之

卒業式も近づいた　小さな中学校
答辞は雅子に決まったが　送辞を誰にと
悩んだ挙句　ひとつの案が浮上した
「卒業生に贈ることば」を一人ひとりが書き
文集にして　卒業生全員に贈ろう
いい文を送辞として　本人に読んでもらおう
在校生がそれぞれの想いを綴る
いい記念文集と送辞が出来そうに思えた

末子はからだが小さく　静かな子だった
手をあげて発言をすることは決してなかった
末子は　ひとことの美辞麗句もなく　ただ

ひたすらに　卒業生に感謝の心を書いた
入学した頃　小学校とは全く違った
掃除の仕方を　優しく教えてもらったこと
まるで　おとなのように大きな上級生が
体育大会の準備や応援の方法を　教えてくれ
それが　とても頼もしく思えたこと
やがて入学して来る下級生に　私達が同様に
しなければならない　しようと思うことなど
「うーん」職員全員　末子を推した

「よく練習をして　お母さんにも　聞いて
　もらいなさい　式にも来てもらいなさい」

　在校生が着席し「卒業生入場」という時
末子は「先生おしっこに行かせてください」
「えっ、どうぞ」人生最大の緊張に違いない
卒業生の入場が終わるや否や　またも小声で
「先生…」「さあさ　行っておいで」
それが送辞本番までに　四回も繰り返された
「送辞！」教頭の高い声に　一瞬息を飲んだ

末子は一歩一歩前へ進み　大声ではないが
ゆっくり　はっきり　「見事な送辞」だった
やったね　末ちゃん

あれから五十余年　思い出しては涙している

真昼の怪談

高岡郡中土佐町
田中福三

待合室の自動扉が開き
足を踏み入れた
一歩二歩
三歩目で私は立ち竦む
視界に入った九人の人たち
その全ての人が高齢者だ
そして全ての人が下を向いている
片手に携帯電話を持つ人
あるいはタブレットを持つ人
全ての人がどちらかを持っている
そして全ての人の片方の手の指が
画面の上を縦横に動いている

まるで生命維持装置でも操作している
かのように

片隅に椅子を見つけて座り
手提鞄から文庫本を取り出し
私は異世界の中で
「周公旦」に集中しようと蹠いていた

監獄惑星

須崎市
倉橋孝彰

罪
為政者は誇大妄想者である
職業軍人は被害妄想者である
故に
核弾頭は一万五千発を超えた
罪
人を殺した罪
人を殺そうとした罪
人を殺すことを指示した罪
人を殺すための武器をつくった罪
人を殺すための武器をつくるための税金を
おさめた罪
人を殺すことを指示した人々を選んだ罪

人が殺されることに無関心だった罪
人を殺させた罪
罪
一番自由な国
一番進んだ国が
一番の人殺しの国だという罪
その国に恭順する国があるという罪
罪
他人の悲しみや苦悩を理解しなかった罪
他人の楽しみや喜びを理解しなかった罪
罪
人のために創造することを失った罪
人のための幸福への追求を忘れた罪
罪
自然を大きく破壊した罪
膨大な数の人間を
動植物を狂気で消滅させた罪
罪
ここは巨大監獄
地球です

佳　作

とめどなく

高岡郡梼原町　吉門　あや子

まあ！元気なかよ
　元気なことあるかよ
　両杖がいるようになったらいかん
わたしも聞こえんし見えんし
足もじゃんじゃん痺れゆう
　いくつになったよ
わたしゃあ大正生まれよ
　そんでも若風でええこと
ええことあるかよ
はよう迎えに来てと拝みゆう
　わたしも手を合わせて頼みゆう
　そんであんた　いくつになったよ

診察室前の長椅子
エンドレスな会話
互いに痛みを数え上げ
ずるうないねと相槌打てば
柔らぐ表情
呼ばれるまで続く会話を
端っこで聞きながら母を思う

おしゃべり大好きだった母は
長引く入院と繰り返す手術に
会うたびに無口になって
最後の言葉は「看護婦さん！」
同じ病を受け継いで
もうすぐ亡くなった母の歳になる
もっと話し合えばよかった
もっと聞いておけばよかった
不自由な体を労ればよかった
今なら　今なら

当分続く通院

同じ予約時間　同じ人達
同じような話をまた聞いて
同じように母を思うのだろう

詩人「尹東柱（ユンドンジュ）」

高知市　いずみ　しづ

海からの風が、さやさやと鳴り始めると、町は秋色に色づきはじめる。夏から秋へその一瞬、私はひとりの詩人を想う。「尹東柱」朝鮮で生まれ日本で二十七歳の若さで没した詩人。

一九四二年、「尹東柱」は「平沼東柱」と名前を日本名に変えて港に降り立った。「立教大学」「同志社大学」順に籍を置き勉学に励んでいた。一九四三年、「特高」に「治安維持法」の疑いで逮捕され、投獄の身となった。

優しい笑顔と夜明けの澄み切った空気のような澄んだ瞳の青年は、暗国の時代、植民地統治国の日本で闇から闇へ放り出されるように獄死した。詩を愛し詩に愛され、言葉を紡いで紡いで生きとし生けるものを愛した青年は、「治安維持法」の名の元で、夢も希望も捨て母国に帰ることも出来ず獄死した。

静かな午後、秋の柔らかな陽ざしのなかで一冊の詩集を開く。尹東柱『空と風と星と詩』。ページをめくるたびに爽やかな風に包まれる。甘い夜の香りと星々の囁きが静かに語りかけてくる。

そんざい

香美市
恩田凍羽

あなたがすきといったものをすきになった
あなたのひとみにうつるせかいと
まったくおなじせかいをうつしたくて
そうすることであなたがかかえるいたみを
きょうゆうできるきがした
あなたにとけだすことがぼくのねがい、

いびつなねがい

あなたがきらいといったものを
きらいになった
あなたのゆびさきにふれるせかいと

まったくおなじせかいにふれたくて
そうすることであなたの
かかえたくるしみを
きょうゆうできるきがした
あなたにとけこむことがぼくのゆめ、

あさましいゆめ

ぼくにとってあなたはすべてだった
うしなえばいっしゅんで
こきゅうこんなんに
おちいってしまうほどに
ぼくのせかいは
あなたをちゅうしんにめぐっていた

あなたがしらないぼくのこと

あなたがうつくしいといったものを
うつくしいとおもった
あなたがいきるせかいと

まったくおなじせかいをいきたくて
そうすることであなたをきずつける
すべてのものから、

あなたをまもれるきがした

水と共に

吾川郡いの町　片岡和子

仁淀川の支流を登って行くと集落がある
いつの頃から、住みついたのか
少しの平地を耕し、自然の中で生きる人々
谷から水を引き、湧き水を飲み、畑を耕す

水車小屋に引かれた谷の水
収穫された穀物を砕く音
水の調節で細かくしたり、粗くしたり
石うすに柱が落ちて大きな音がする
水の力で動くその仕組みを飽きずに眺める

学校の帰り、寄り道をして谷で遊ぶ

顔を洗い、手ですくって水を飲む
メダカとモツゴが泳ぎ、この至福の一瞬は、
生涯、私の心を癒す、夏は谷が天然のプール
喚声が木霊し、躍動する

田んぼには谷から水が引かれ
牛を引っぱる父、泥の中で遊ぶ私
梅雨と共に田植が始まり
昼にはしば餅が振る舞われ
一年に一度の結いの作業
笑いと喜びに満ち溢れた山村の姿

水と共に生きる生活
時には豪雨もあり、台風も来る
谷の水は一瞬にして増水する
道路が寸断され、崖崩れもある
しかし、怯むことなく、復興する

テレビのない時代
ラジオと遅れてくる新聞からの情報

徒歩でくる行商の人、郵便配達の人
小さな丸木橋を渡り
集落から集落へ
自然の中で、四季の変化を感じ生きてきた
水と共に生きる山の暮らしを思い出す

亡は　母は

幡多郡黒潮町　國友　積

冷蔵庫の隅に転がっていた
キャベツの芯を味噌煮にして食べてから
何も食べずに三日過ごしたことがあった
アルバイト代が入るのは五日後だったから
あの時の千円の仕送りはとても嬉しかった
そういう苦学生の頃の話を
久しぶりに帰郷した子供たちに
半ば自慢げに話していた
傍らでニコニコしながら聞いていた母が
ポツリと話を継いだ
あの時仕送りできる千円のお金がなかったと
若くして夫を亡くした母は

三つの仕事を掛け持ちして
三人の子供を大学へ進学させた
兄弟からそんな無理な事はよせと言われたが
勉強したくても出来なかった自分の
二の舞にはさせないと頑なで
それで兄とケンカにもなった
知人に借金したりすることは絶対嫌で
ましてや兄弟に金の無心などできず
腹を空かした息子の連絡に　困り果てた
僕は千円でいいから送ってほしいと
軽く言った四十年前の電話を思い出した
あの時は心配で心配で……
夜やったけど畑の近くに住んでいた徳さんに
どうしても明日までに千円のお金が入り用で
何とか便所の汲み取りをさせてくれんろうか
と頼みこんで一晩中かかって汲み取って……
その時もらった千円だったがよ
母は笑いながらそう言った

何も知らなかった四十年が

一人で生きてきたというような傲慢さが
恐らくさり気なくも毎日溢れていたであろう
膨大な無償の愛に生かされてきたという
事実の凄みに粉々になり
僕は感謝のど真ん中で言葉を失った

短

歌

芸術祭文芸賞一首

二階屋の網戸六枚張り替へて鮎の遡上のごとき子ら待つ

安芸郡東洋町　蛭子泰明

芸術祭文芸奨励賞五首

耳もとに蚊の音のして溽暑の夜夢に栞を挟みて覚める

高知市　尾﨑淳

雪を被く忠霊塔の墓碑銘にずらりと並ぶ一村の死者

四万十市　左山遼

音読す夫（つま）は胡座に子を抱きて八十ページ水を飲みつつ

南国市　井上志津

歩いたら桜の風が吹いて来る小学校の最後の春だ

土佐市立高岡第一小学校六年　竹村有未

向日葵に虹色の光照りとほる焦がれる恋の眼差しのごとく

高知県立須崎工業高等学校三年　松田悠大

佳作

新之丞を殺めたる太刀洗ひしとふ谷よぢのぼる地籍調査に

吾川郡いの町　中島　涼

バス降りる我の足もと確かめて若き運転手笑みて手上げる

高知市　沢村洋子

峰ちかき山家に配る郵便の職に生きたるわが足撫づる

土佐市　矢野重雄

南溟に兜太いくらし精霊舟ひたすら波濤乗り越えてゆく

南国市　山　﨑　光　子

おばあちゃん朝一番に仕事行くやっぱり一番働きものだよ

土佐市立高岡第一小学校六年　谷　柚　帆

俳

句

芸術祭文芸賞一句

青空へ投げる数式夏の果

土佐女子高等学校二年　筒井南実

芸術祭文芸奨励賞五句

満身のやはらかなりし鯉幟

高知市　足立秋子

片減りの鍬も受け継ぎ秋耕す

高岡郡日高村　中村梅子

水桶の箍は青竹新豆腐

土佐清水市　山﨑紀美子

蠅叩吊つて赤牛飼ふ暮し

高知市　和田和子

立秋や垂らして何も持たない手

香南市　乾真紀子

佳作

捩花をほどけば吉と出る予感

土佐市　矢野重雄

足弱の母の流灯躓きぬ

高知市　岡林知世子

脇付にまゐるの三文字十三夜

香美市　明石韮生

境内の暗きに点す立版古

高知市　竹中良子

囀や岬の寺の涅槃仏

高知市　島崎有造

また人を寂しがらせて水澄めり

高知市　田村乙女

たんぽぽといっしょに飛び立つ卒業生

土佐市立高岡第一小学校六年　村岡希音

佇めば迷子に戻る夜店かな

高岡郡四万十町　熊谷敏郎

鳥渡る木の橋多き山の町

高知市　大窪雅子

青時雨古仏の如き母を拭く

吾川郡いの町　山下正雄

川

柳

芸術祭文芸賞一句

秋の星金平糖が歌いだす

高岡郡四万十町　山本由美

芸術祭文芸奨励賞五句

てのひらに君と歩いた地図がある

四万十市　近藤糾

はいチーズだなんて嫌い鮟鱇鍋

高知市　足立秋子

サンダルの形どおりに日焼けする

土佐市立高岡第一小学校六年　瀧本あおい

ひばあちゃんが一番多いお年玉

土佐市立高岡第一小学校六年　藤田歩

何気なく結んだ糸がほどけない

須崎市　徳永逸夫

佳作

ここまでが家の畑と彼岸花

高知市　沢村洋子

あの時はあれで良かったはずでした

四万十市　大野美智子

夏の道グラグラゆれるアスファルト

土佐市立高岡第一小学校六年　笹岡日向

断捨離のふるさと最後に取っておく

室戸市　山本世志恵

こいのぼり子どもが親をかたぐるま

土佐市立高岡第一小学校四年　藤田ゆずあ

三色の二色は付かずボールペン

吾川郡いの町　山下正雄

平成は斜体で棚に立ててておく

高岡郡四万十町　熊谷敏郎

桃缶とスタッカートで生きてゆこ

吾川郡いの町　岡林裕子

トントントン風のお客がノックする

土佐市立高岡第一小学校六年　長瀧叶太

審査評

短編小説審査評

今年は十三歳から八十六歳と幅広い年齢層から五十編の応募があった。その作品は歴史に材をとっていたり、童話の世界であったり、あるいは幻想的なものと様々な手法と視点で書かれており、読みながら文学の表現の広さと可能性を改めて感じさせられた。ただ数作は規定枚数よりかなり少なく、半分白い画用紙の絵を見るようで少し残念だった。それらの作品は十三～四歳の年齢で力量もあるかと思うが、来年は若い力が画面いっぱい溢れる表現を期待したい。若い人たちの参加には夢が広がる。

選考の結果文芸賞と奨励賞を決定したが、選に入らなかった作品とは微妙な差であった。特に「じいちゃんのストリートビュー」（マサキマサミ）は高齢者がストリートビューを楽しむ光景が軽妙に描かれていて評価が高かったが、漫画的表現に意見が分かれた。他にも漫画の要素が入った作品があったが、優れた漫画には小説より文学的なものがあるので、その表現をどう受け止めるかは難しい。

「間いの豊饒」は手術の後、夢と現の間に揺れる時を表現した作品である。優れた文章力を持った作者であるが、書道家である主人公が途中から書について全く語らなくなったこと、また以前思いを寄せたかもしれない女性が単に挿入話になっている点に物足りなさを感じた。

「泣きたくなったら、ここへおいで」は恋人を失った若い女性の心情を描いている。女性は亡くなった彼が育った須崎、浦ノ内湾にやって来て、巡航船に乗る。なぜか神様と呼ばれるその船長とのさらりとした会話など、作品全体に流れる爽やかな印象を選者全員が評価した。しかし「泣く」「笑う」という言葉が何度も使われている点に課題を感じた。同じ言葉を繰り返すと逆に印象が薄くなるというのは審査員の一致した意見だった。

「時が消えた森」は亡くなった妻が死産してから執着するように集めていた苔を森に取りに行く話である。作品全体に森の静謐な空気と時の流れが聞こえるような雰囲気が漂う落ち着いた作品である。亡くなった妻に電話しての会話、森の中で「そろそろ、あなたの時間を動かして」という言葉は意味が深い。そして森から帰った男が再び電話するが、受話器からは機械音がするだけである。電話の場面を通して男の静かな再生を暗示している。

その他に議論となった作品に、「沈下橋のある河原で」（植木博子）「夕闇の陥穽」（曽我部仁志）「再会のとき」（岡本敏之）「預命在り」（石丸寛治）「夏の邂逅」（吉岡雅菜）などがあった。

（審査員――米沢朝子、若江克己、文責・杉本雅史）

詩審査評

「おれおれ」昔から子どもと年寄りには金を持たすな、陸なことは無い。とよく言われる。世の中、振り込め詐欺が横行している。人の欲や情に付け込むのが、詐欺の常習だが。犯人とのやりとりの会話が絶妙である。すべてひらがなで書かれているのがいい。こういう健全な精神が、詩には大切である。秀作です。

「一日の終わり」よくできている。何もいうことはない。わたしも足の指を揉んでもらいたくなった。自分で揉みなさい。といわれそうだが。

「あなたは柳」樹木は蟻より人間に近いといわれる。勿論、科学の見解ではないが。柳になりたいという気持ちが、ここちよい。柳の木に毎日話しかけ、時時抱きしめて、柳の鼓動をきいていると、いつの日かあなたも柳になれますよ。きっと。そして風に吹かれる柳の歌を聞かせてください。

「やったね、末ちゃん」体が小さく、静かな末子が今どんな大人になっているか想像したくなる作品である。きっと子どもを数人産んで、何にも動じない逞しい母親になっているのでは。と想像してしまう。

「真昼の怪談」この九人の高齢者はみんな二進法で齢をとっているのだ。もうとっくに作者よりはるか年上だろう。いたる所スマホ依存症であふれている。「周公旦」に集中して、あなたが異世界に入るしかない。

「監獄惑星」人間はどうしようもなく同類を殺したりいたぶったりするのが、大好きなのだ。三千年の間に五千の戦争。今もいたる所で戦争している。この地上から戦争がなくなることはないのだ。さて、どうするか。

全体的に勉強（情報）不足です。口語自由詩の文学史上に残る作品を、できるだけ多く読んでください。そして一日一編、三日に一編と作品を少しでも多く書いてください。駄作結構。ある日、量が質に変る時が必ずきます。それまで書き続けてください。詩の表現の技術は五年も続ければ、身につきます。応募数六十編。

（審査員――小松弘愛、林嗣夫、文責・長尾軫）

短歌審査評

今年の応募は一一九人から三一五首。小学校からの応募は土佐市立高岡第一小学校。応募作品中より先ず、選者が挙げた五十四首について、審議を重ねた結果、以下の六首を入賞とした。

文芸賞

二階屋の網戸六枚張り替へて鮎の遡上のごとき子ら待つ　　蛭子　泰明

夏休みか盆か、子や孫らを迎える我が家。その日のために準備する作者の弾んだ心持ちが、網戸六枚張り替えるという具体で表現されている。「鮎の遡上のごとき」とは独自の表現で、命盛んな様子が躍如としている。

文芸奨励賞

耳もとに蚊の音のして溽暑の夜夢に栞を挟みて覚める　　尾﨑　淳

耐え難いほどの蒸し暑さを表すのに、作者は溽暑という言葉を選んだ。寝苦しく、蚊の音で目覚める。夢の途中で、栞を挟んで覚めるとは。だが読書のように、続きは見られない。暑さがとりわけ厳しかった今年の夏を余裕ある一首に止めた。

雪を被く忠霊塔の墓碑銘にずらりと並ぶ一村の死者　　左山　遼

わずかな人口の村から戦争に狩りだされ帰らなかった人々。その数の多さが心に沁みる。墓碑銘は警告である。そのことを静かに訴えている。

音読す夫は胡坐に子を抱きて八十ページ水を飲みつつ　　井上　志津

胡坐の中に入る子どもは幼いだろう。読み聞かせ八十ページとはかなりの量。気長にがんばる夫、耳を傾ける子、それを見守る作者が見える。平和な家族の時間が流れている。

歩いたら桜の風が吹いて来る小学校の最後の春だ　　竹村　有未

六年間の学校生活、いよいよ卒業だ。その前向きで、引き締まる気持ちが一首からいきいきと伝わる。「桜の風」がよい。また、きっぱりとした結句が効果的。

向日葵に虹色の光照りとほる焦がれる恋の眼差しのごとく　　松田　悠大

陽を浴びるひまわりの花の様子に、自分自身のひたむきな気持ちを込めているようだ。表現への努力が窺われる。作者十七歳。

佳作

中島　涼　沢村洋子　矢野重雄　山﨑光子
谷　柚帆（土佐市立高岡第一小学校）

（審査員――市川敦子、中野百世、文責・梶田順子）

俳句審査評

応募句数は六四〇句。人数一四〇名。ともに昨年とほぼ同数である。年齢は十一歳から最高齢は九三歳。幅広い年齢層といいたいところだが、二十代から五十代という次代を託すべき層が極端に薄いのは変わらない。この年代の方々の伝統詩形への関心と参加を期待したいし、働きかけを私ども俳人は当然、また高知県の文化を推進する各種の関係者や機関にもお願いしたいところである。

文芸賞の作品。

青空へ投げる数式夏の果　　筒井　南実

内容から見て若い方の作品だろうと推測した。夏休みの頃だろうか。数式を空に投げるなどとスラリと言い放つ大胆さは若さに溢れている。といっても別に力んでいる訳ではなく、従来の俳句的な発想や表現から素直に自由に解き放たれたような感性のひらめきが新鮮だった。

次に奨励賞の五句。

満身のやはらかなりし鯉幟　　足立　秋子

なるほど言われてみれば、鯉幟というものは「やはらか」く空になびき、また垂れているものだ、という存在感を感じさせてくれた。「満身の」という意表をついた把握の導入から鯉幟へと着地する展開にも意外性がある。

片減りの鍬も受け継ぎ秋耕す　　中村　梅子

長く使って馴染んだ道具というのは鍬に限らず使用者の癖がつく。父母のどちらかが使った鍬なのだろう。その片減り鍬を見ていると顔も姿もしみじみ浮かぶ。「秋耕」という哀感ある秋の季節が効果的である。

水桶の箍は青竹新豆腐　　山﨑　紀美子

箍は桶の周囲にはめて丸い桶を押さえつける。真っ白い新豆腐の桶のそれがまだ青い竹だったことに、作者は新鮮な映像を見た。中七の「は」の助詞の働きが、二つの色の鮮やかさを鮮明に浮かび上がらせている。

蠅叩吊つて赤牛飼ふ暮し　　和田　和子

蠅叩きは実にリアルな生活感のある道具。それを吊って飼う牛が赤牛であることも一層リアルさを強調する。そういった暮らしを堂々と書く作者は、誰に阿ることのない暮しに誇りを持っているのである。素晴らしい。

立秋や垂らして何も持たない手　　乾　真紀子

秋立つという爽やかな季語に、自分の両手は何も持っていない、と些かの自嘲と諧謔の言葉を添えた。意表を衝いて飛躍した展開に、現代の俳諧精神とでも言いたいような面白さや楽しさを思わせてくれた作品。

（審査員――植田紀子、橋田憲明、文責・味元昭次）

川柳審査評

今年の川柳部門の応募総数は五百句、応募人数は百八人で例年よりも多かった。今年の応募作品の特徴は、力みのある句が少なく日常の中から自分の言葉で十七音字に切り取った作品が目立った。今年はとくに、ジュニアの新鮮な表現の句に驚かされた。そして、応募数も多かった。慎重に審査にあたり、次のように受賞作を決めた。

文芸賞は次の一句。

秋の星金平糖が歌いだす　　山本　由美

今年の夏は週末のたびに台風が襲来した。北海道では地震があり、ブラックアウトという信じられない全道停電があった。そんな平成最後の荒々しい夏が過ぎた。その秋の一夜、昭和の時代の象徴のような金平糖をてのひらに置いてみた。夜空を見ながら、ほっこりとした金平糖の甘さや手触りを忘れずに、新しい時代を迎えたいとの作者の想いが伝わってくる。「金平糖が歌いだす」が素敵な表現。次に、文芸奨励賞。

てのひらに君と歩いた地図がある　　近藤　糾

ここまでふたりで過してきた時間は、ふたりで地図を書いてきたような確かさがある。これから先はどんな人生になるかはわからない、その不安はきっとこのてのひらの地図を見ればなんとかなってゆくのだ。若者二人の姿が浮かんでくる、爽やかな一句になった。

はいチーズだなんて嫌い鮟鱇鍋　　足立　秋子

「鮟鱇鍋」と「はいチーズ」の取り合わせが絶妙。最近は飲食店で食べる前に写真を撮るのが珍しくない。鮟鱇鍋は、はいチーズには遠い中年の男性たちが冬に突っつくイメージがある。いや、鮟鱇そのものが、そんな軽薄なことをするものかと主張しているのかも。

サンダルの形どおりに日焼けする　　瀧本　あおい

くっきりとサンダルの形に白い肌が残った、日焼けした足が目に見える。小学生の生活の中からの見つけが素晴らしい。頭の中で作った句ではない、言葉が踊っている。リズム感はジュニアとしては秀逸だ。句材はどこにでもある、そんな見本の句。

ひばあちゃんが一番多いお年玉　　藤田　歩

ひばあちゃんは孫、ひ孫のために年金を貯めている。おばあちゃんよりひばあちゃんのほうがお金持ちなのだ。お年玉をあげるひばあちゃんのにっこりの顔が浮かぶ。「あんたは誰だったかね」と、名前を確かめたりして。ジュニアの素直な気持ちの伝わる句。

何気なく結んだ糸がほどけない　　徳永　逸夫

「何気なく」がいい。往々にして揉め事は何気ないことから始まる。何気ない相槌、何気ない約束、そこからことが重大になってゆく。国と国、政治一般の社会への鋭い風刺を柔らかな言葉で包んでいる。

（審査員――窪田和広、西川富恵、文責・小笠原望）

平成三十年度高知県芸術祭
文芸賞作品募集要項

一、趣　　旨

高知県芸術祭文芸賞は、広く県民の皆様から作品を公募して、すぐれた作品を顕彰し、地方文化の発展と本県文芸の振興を図ることを目的としています。

二、主　　催

高知県・（公財）高知県文化財団

三、主　　管

高知県芸術祭執行委員会
（事務局　（公財）高知県文化財団内）

四、公募作品の部門

短編小説　一人一編
詩　一人一編
短　歌　一人三首以内
俳　句　一人五句以内
川　柳　一人五句以内

五、締　切　日

平成三十年九月二十八日（金）当日必着

六、作品送付先

〒七八一―八一二三　高知市高須三五三―二
（公財）高知県文化財団内
「高知県芸術祭執行委員会事務局」あて

七、発　　表

平成三十年十一月上旬に本人及び報道機関あてに通知します。（平成三十年十二月十六日に表彰式を行います。）

八、選　　賞

・短編小説
「高知県芸術祭文芸賞」一編　表彰状と副賞
「高知県芸術祭文芸奨励賞」二編　表彰状と副賞
・他の部門
「高知県芸術祭文芸賞」一編　表彰状と副賞
「高知県芸術祭文芸奨励賞」五編　表彰状と副賞
他に佳作を選ぶことがあります。
佳作には表彰状と副賞が授与されます。

九、応募時の注意事項

・類似（類想）作品の存在が明らかになった場合や、盗作が疑われる場合は、賞の発表後でもこれを取り消すことがあります。その場合に発生した著作権侵害に関わる問題は、応募者の責任となります。また、取り消しにより生じた損害（経費）については応募者に負担していただきます。

十、応募条件

未発表作品に限り、応募者は高知県在住者に限ります。

＊私的な会や学習会で発表した作品、メンバー内での回覧、資料とするための目的で活字化した作品は「未発表」とみなします。

＊その他、上記の基準等に則して、事務局が判断する場合もありますので、ご了承ください。

十一、作品への記載事項

①部門名　②氏名（フリガナ）＊ペンネームご使用の場合は併記　③住所　④電話番号　⑤年齢

を必ず明記してください。記載場所等は部門ごとに異なります。

十二、部門ごとの注意事項

短編小説

■作品本文は四百字詰原稿用紙十枚以内。

■パソコンの場合、二十字×二十行で設定してください。フォントは十二以上。

■必ず、作品本文にページ番号をふってください。ホッチキス留めは不要。

・一枚目…タイトルを明記

・二枚目～十一枚目…作品本文

・十二枚目…部門名・氏名・住所・電話番号・年齢を明記。

詩

■作品は本編四百字詰原稿用紙二枚、三十七行以内。

・一枚目…一行目上方に部門、作品名、二行目下方に氏名を記入。

（三行目はあけて）四行目から作品本文を書き始めてください。

・三枚目…住所・電話番号・年齢を明記。

短歌・俳句・川柳

■通常はがきを使用してください。

※学校から、まとめて応募の場合は、はがきサイズ

の用紙へ記入しても可。

■全部門とも自由題。作品は楷書・タテ書きで書いてください。

・はがき表面に部門名を必ず記入してください。

・氏名・住所・電話番号・年齢は作品末尾に記入してください。

＊応募作品は返却しません。

＊個人情報は、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用させていただきます。

ただし、入選作品については、在住市町村名、氏名、年齢を公表します。

＊入選作品の著作権は、高知県及び（公財）高知県文化財団が所有します。

十三、審　査　員（五十音順）

短編小説：杉本　雅史　米沢　朝子　若江　克己

詩　：小松　弘愛　長尾　軫　林　嗣夫

短　歌：市川　敦子　梶田　順子　中野　百世

俳　句：植田　紀子　橋田　憲明　味元　昭次

川　柳：小笠原　望　窪田　和広　西川　富恵

十四、問い合わせ先

「高知県芸術祭執行委員会事務局」

（公財）高知県文化財団内

（ＴＥＬ　〇八八―八六六―八〇一三）

二〇一八年十二月十六日　発行

編集発行　高知県芸術祭執行委員会

事務局　高知県高知市高須三五三－二

（公財）高知県文化財団内

印刷所　高知市城山町三六

西富謄写堂

（非売品）